

# 地域自然史と保全研究大会2023

## 関西自然保護機構 (KONC) 2023年大会 プログラム・講演要旨集

◆日時：2023年2月26日（日） 10:00～16:30

◆会場：大阪市立自然史博物館 本館 講堂・ナウマンホール

◆参加費：無料（ただし博物館入館料が必要）

◆主催：関西自然保護機構・大阪市立自然史博物館

◆プログラム◆ ポスター掲示（10:00～16:30）

10:00～10:30 関西自然保護機構2023年度総会

10:30～11:15 2022年度四手井賞授賞式典・授賞記念講演

11:15～12:30 口頭発表（2022年度研究助成事業研究報告会）  
（昼休み）

13:30～14:30 ポスター発表 コアタイム

14:30～16:30 シンポジウム 『『視えない』外来種問題』

■2022年度四手井賞 授賞式典・授賞記念講演（10:30～11:15）■

●Z01 「徳島県立博物館所蔵標本からみた瀬戸内海における希少魚イドミミズハゼの分布と形態」

井藤大樹（徳島県立博物館）

イドミミズハゼは礫床間隙等に生息するハゼ科魚類である。本種は採集が困難で保全に必要な基礎情報は不足している。本研究では瀬戸内海における本種の分布と形態的特徴を明らかにするため、徳島県立博物館所蔵標本を対象に調査を行なった。調査の結果、新たに24河川の河口部で本種が生息することが明らかとなった。これらの標本は渋川ほか（2019）が報告した体高が高く、尾柄部のキールが発達する型に該当する可能性が高い。

■口頭発表（2022年度研究助成事業研究報告会）（11：15～12：30）■

- 001 「外来土壌動物ヤンバルトサカヤスデの和歌山県内における侵入状況」  
○澤畠拓夫・坪田紗季・尾崎一天・芳谷昂紀（近畿大学農学部）
- 002 「農薬と温暖化の複合影響は、カエル幼生の捕食回避戦略にどう作用するか」  
石若直人（近畿大学大学院農学研究科）
- 003 「外来種ムネアカハラビロカマキリの季節生活環と個体群動態」  
井岡来斗（大阪公立大学大学院農学研究科）
- 004 「『大阪教育大学長田研究室コレクション』の1970年代大阪府産魚類標本調査」  
伊崎永久（倉敷芸術科学大学・生命科学部・生命科学科）
- 005 「滋賀県東部におけるオオガタスジシマドジョウ河川陸封集団と近縁種の共存要因の探索」  
和田一步（近畿大学農学研究科）

■シンポジウム（14：30～16：30）■

■「『見えない』外来種問題」

外来種の移入は生物多様性を脅かす4つの危機の1つに数えられる。大型動物や種子植物の外来種問題は、近年脚光を浴びることが多い。ところが、アリ以下のサイズの小型動物、寄生生物、微生物などについては、その影響の大きさの割に注目されることが少ない。そこで本シンポジウムでは、アリ、寄生虫、微細藻類による外来種問題を文字通りクローズアップしてその実像に迫るとともに、自然環境と人間生活への影響を考える。

- S01 「私たちの足下でふえている外来アリ類」  
上田昇平（大阪公立大・農）
- S02 「水域における外来寄生虫」  
浦部美佐子（滋賀県立大・環境科学）
- S03 「要注意！琵琶湖淀川水系の「ミクロの外来生物」」  
大塚泰介・根来 健（琵琶湖博物館）、佐藤晋也（福井県立大・海洋生物資源）、石川可奈子（琵琶湖環境科学研究センター）、辻 彰洋（国立科学博物館・植物）
- S04 「コメント：外来種がもたらす関係性の変化」  
岩崎敬二（奈良大・文）

■ シンポジウム 講演要旨 (14:30~16:30) ■

●S01 「私たちの足下でふえている外来アリ類」

上田昇平 (大阪公立大・農)

アリは全陸上動物の総重量のうち2割を占め、現存量はヒトと同程度であると推定されている。経済のグローバル化が拡大する中、ヒアリやアルゼンチンアリなど侵略的外来アリ類の世界的な分布拡大が加速している。そのことは経済的損失や人的被害を及ぼすだけでなく、在来アリが支えてきた生態系機能を根底から変えてしまう危険性がある。本講演では、侵略的外来アリ類の地域生態系への影響を、実例をあげながら紹介する。

●S02 「水域における外来寄生虫」

浦部美佐子 (滋賀県立大・環境科学)

外来種がもたらす弊害の一つに病原体の持込みがあり、世界的にはヒトや養殖魚への被害も多く報告されている。外来種となりにくいとされてきた寄生虫も、外来生物の増加に伴って新しい生息地へ広がるケースが増えてきている。近年、日本の淡水域に侵入した外来寄生虫の例として、カワヒバリガイと共に移入した淡水産腹口吸虫類、およびバス類と共に移入したバス条虫の事例を紹介し、在来生態系に与える影響について考察する。

●S03 「要注意！琵琶湖淀川水系の「ミクロの外来生物」」

大塚泰介・根来 健 (琵琶湖博物館)、佐藤晋也 (福井県立大・海洋生物資源)、石川可奈子 (琵琶湖環境科学研究センター)、辻 彰洋 (国立科学博物館・植物)

微細藻類の外来種は、HAB (有害藻類ブルーム) の形成により生態系に顕著な悪影響を及ぼし、水道や漁業にも被害を及ぼすことがある。本発表では近年になって琵琶湖淀川水系で見られるようになった微細藻類のうち、既にHABを形成したか今後その恐れがある5種、ミズワタクチビルケイソウ *Cymbella janischii*、底生ラン藻 *Microseira wollei*、浮遊ラン藻 *Dolichospermum minisporum*、*Planktothrix pseudagardhii*、*Raphidiopsis raciborski*を紹介する。

●S04 「コメント：外来種がもたらす関係性の変化」

岩崎敬二（奈良大・文）

外来種は、生態系、産業、ヒトの健康や身体に危害が及ぶ場合にだけ問題とされ、「特定外来生物」もそのような観点から指定される。しかし移動能力の乏しい生物種がヒトによって持ち込まれ外来種となること自体が、これまで変遷やゆらぎの中で成立してきた地域固有の生物群集の種組成を変え、在来種どうしの種間関係にも影響を及ぼす。結果として地域自然誌の研究成果の積み重ねを反故にし、将来予測を無効化することになる。

■口頭発表 講演要旨（11：15～12：30）■

●001 「外来土壌動物ヤンバルトサカヤスデの和歌山県内における侵入状況」

○澤島拓夫・坪田紗季・尾崎一天・芳谷昂紀（近畿大学農学部）

和歌山県におけるヤンバルトサカヤスデの侵入は瀬口ら（2020）と松野（2022）により9地点で確認され、さらに松野（2022）は紀伊大島と空港の2地点での侵入を示唆していた。本調査ではさらに紀伊大島と新宮市を加えた13地点で侵入を確認できた。紀伊大島では、ほぼ全域に広がってしまっているが、このような場所は少なく、まだ侵入は局地的であることから、早急な防除対策の実施が望まれる。

●002 「農薬と温暖化の複合影響は、カエル幼生の捕食回避戦略にどう作用するか」

石若直人（近畿大学大学院農学研究科）

近年、農薬をはじめとする環境ストレスの増加に伴い、水田内の中間捕食者であるカエル類が急速に減少している。さらに今後、農薬曝露と温暖化の複合作用により、カエル類はより減少する可能性も考えられるため、両要因が与えるカエル類への影響評価は欠かせない。本発表では、カエル幼生の生存に重要な「ケミカルキュー」を介したカエル幼生の捕食回避行動に対する、両要因の複合影響を評価した結果について議論する。

●003 「外来種ムネアカハラビロカマキリの季節生活環と個体群動態」

井岡来斗（大阪公立大学大学院農学研究科）

2022年9～10月に、奈良県吉野郡川上村の1地点で週に一度計12日、外来種ムネアカハラビロカマキリの目視調査と標識再捕獲調査を昼夜に実施した。本種の確認個体数は昼間より夜間の方が多かったことから、本種は夜間の方がより活発に行動すると考えられた。再捕獲率は14%と低かったことから、本調査地に極めて多くの個体が生息している可能性、もしくは、本種が積極的に移動分散している可能性が考えられた。

●004 「『大阪教育大学長田研究室コレクション』の1970年代大阪府産魚類標本調査」

伊崎永久（倉敷芸術科学大学・生命科学部・生命科学科）

大阪教育大学長田芳和博士の研究室により収集された大阪府産淡水魚類標本の調査を実施し、168ロット8,951個体を確認した。1970年代淀川水系の標本が主体であり、現在淀川で絶滅した可能性が高いスジシマドジョウ類や個体数が激減したタナゴ類の標本が含まれていた。これらの標本は淀川の河川改修開始当初には豊かな魚類相が保たれていたことを証明する重要な資料であり、魚類相保全へ大きく寄与するものとする。

●005 「滋賀県東部におけるオオガタスジシマドジョウ河川陸封集団と近縁種の共存要因の探索」

和田一步（近畿大学農学研究科）

オオガタスジシマドジョウは琵琶湖固有種で、通常は琵琶湖と流入河川を回遊する生活史を持つことが知られているが、滋賀県東部の佐久良川には通年河川内に生息する河川陸封集団が存在する。本種は近年減少傾向にあるにも関わらず、河川陸封集団は保全対策を行う上で重要な生態的知見が乏しい。そこで本研究では佐久良川において、本集団と同所的に生息する近縁なニシシマドジョウの繁殖期を推定するために採集調査を実施した。

■ポスター発表 講演要旨（コアタイム 13：30～14：30）■

●P01 「120年ぶりに一斉開花期を迎えたハチクの再生過程」

○土井裕介・石井 亘（大阪環農水研）

ハチクは120年周期で一斉開花すると考えられている。ここ数年がその周期にあたり、新聞記事やSNS等で話題となっているが、長期的な周期のため調査事例は極めて限られている。当センターに植栽された13本のハチクは2021年4月に一斉に開花し、2023年2月には幹や葉が褐変して枯死した。一方で、地下茎からは新たに小型の稈が出現してきた。発表では開花からの約2年間における新たな稈の出現および開花等の推移について説明する。

●P02 「西日本における雑種タンポポの割合の5年間の変化」

○城垣 徹（大阪公立大学大学院理学研究科）、児玉大志（大阪市立大学理学部）、長船友紀（大阪市立大学大学院理学研究科）、名波 哲・伊東 明（大阪公立大学大学院理学研究科）

セイヨウタンポポは、在来タンポポと雑種を形成することから、重点対策外来種に指定されている。DNA情報に基づき雑種タンポポとセイヨウタンポポを区別し、西日本各地で2015年と2020年の雑種タンポポの個体数の割合を比較したところ、雑種タンポポが占める割合は高くなっていた。また、在来種と戻し交雑して出来た雑種タンポポが増えている可能性が示唆され、今後雑種タンポポの動態に注視する必要がある。

●P03 「大阪二色の浜の海岸植生—海浜植物の多様性と外来植物の定着」

○久保諒真・前迫ゆり（大阪産業大学デザイン工学部環境理工学科）

大阪府貝塚市二色の浜は養浜海岸（1987～1996）であるが、絶滅危惧I類に指定されているハマボウフウが自生するなど（楠本・村瀬，2014）、海浜植物の重要なハビタットでもある。その一方、自動車の乗り入れなど、人為的攪乱が高く、外来植物の侵入・定着がみられる。本研究は、今後の海浜植生の保全を行うための基礎資料を得ることを目的として行われた。調査の結果、海浜植物はコウボウムギ、コウボウシバ、ハマヒルガオ、オカヒジキなど10種を確認した。その一方、海岸線の50m以上の後背地では特定外来生物オオキンケイギク、アレチウリ、シナダレスズメガヤなどが多く定着していた。

●P04 「休耕田の水張り水田化による水田雑草の保全に関する研究」

○原田美幸・藤原宣夫（大阪公立大学・生命環境科学域・緑地環境科学類・緑地保全学研究グループ）

大阪府富田林市佐備の棚田を研究対象地として休耕田の水張り水田化を行い、対象地の散布体バンクを用いた植物相の保全手法として水張り水田化の有効性を実験により確認した。土壌試料を採取し撒き出し法によって行った対象地の散布体相の調査によりイトトリゲモをはじめとした8種の稀少植物を含む17種の散布体が含まれていることがわかり、水張り水田の植生調査の結果から休耕田の水張り水田化は有効であると考えられた。

●P05 「大阪府における特定外来生物オオバナミズキンバイの現状」

横川昌史（大阪市立自然史博物館）

特定外来生物に指定されている水生植物のオオバナミズキンバイは、2014年にはじめて大阪府で発見されて以来、年々生育地を拡大している。駆除が進んでいる場所もある一方で、生育面積が広がっている場所や新たに見つかった場所もある。本報告では大阪府におけるオオバナミズキンバイの現状を紹介するとともに、多くの人にオオバナミズキンバイがどんな植物が知ってもらい、早期発見につながる包囲網を作る足掛かりにしたい。

●P06 「近畿地方における外来種チュウゴクスジエビの分布」

○今井 正（水産機構技術研）、上田尚志（豊岡市立コウノトリ文化館）、大貫貴清（東海大海洋）、小笠原長護・斉藤英俊（広島大院統合生命）

2005年に静岡県で初めて確認された外来種チュウゴクスジエビは、Imai & Oonuki (2014)によって在来種スジエビとの簡易な見分け方が示されて以降、国内からの記録が増加し続けている。本発表では我々の調査で近畿地方で本種が確認された大阪府11地点、兵庫県12地点、京都府、三重県、和歌山県の各1地点の計26地点を紹介する。

●P07 「国外外来種チュウゴクスジエビの国内における移入状況の整理」

○内田大貴（株式会社環境指標生物）・古旗峻一（株式会社オリエンタルコンサルタンツ）・高野季樹（筑波大・院・生物）

チュウゴクスジエビは、近年各地で移入が確認されている国外外来種である。在来種のスジエビとは、生息環境の重複等から競合が懸念されている。本研究では、国内の侵入状況把握を目的とし、2023年1月までの野外や流通での確認報告・記録文献と、著者の標本を伴うデータを整理した。今後の分布拡大を防止するためにも、このような基礎データと利用が重要であり、普及啓発や予防対策等の措置を講じていくことが急務であろう。

●P08 「日本における外来鳥類ハッカチョウの分布」

和田 岳（大阪市立自然史博物館）

ハッカチョウ (*Acridotheres cristatellus*) は、中国南部から東南アジアに分布するムクドリ科鳥類で、沖縄県以外の日本で見られる個体は、飼い鳥由来の外来生物と考えられる。東日本では、かつては東京都や埼玉県でも繁殖していたが、現在は神奈川県にのみ定着している。一方、西日本では最初に兵庫県に定着した後、香川県、大阪府、岡山県と次々と分布域を拡大しており、2010年代後半以降、京都府と奈良県にも定着しつつある。2022年時点の分布状況を紹介する。

●P09 「大阪府南部に設置した巣箱におけるフクロウの繁殖状況と餌動物」

前西優妃（大阪府大・生命）、村濱史郎（日本バードレスキュー協会）、平井規央・○上田昇平（大阪公大院・農）

大阪府南部の11地点に設置した巣箱で2022年3～5月に週1回、フクロウの繁殖状況を調査した。その結果、6地点で産卵が確認され、1巣あたりの産卵数は3～4個であった。うち3地点で孵化が確認され、1巣あたりの巣立ち雛数は2～3個体であった。4地点の巣箱で2022年1～6月に自動撮影カメラを用いて本種の餌動物を調査した。その結果、雛の孵化前には主に小型哺乳類を利用するが、孵化後にはそれに加えて、多足類や爬虫類など多様な餌動物を利用することが明らかになった。



●P10 「兵庫県白髪岳におけるニホンジカ (*Cervus nippon*) と鳥類群集の関係」

○矢芝将士・前迫ゆり (大阪産業大学デザイン工学部環境理工学科)

ニホンジカの影響は植生劣化にとどまらず、鳥類群集や昆虫への影響も指摘されている。本研究ではシカの採食影響がみられる兵庫県丹波篠山市の白髪岳 (標高721m; 関西百名山) において、ルートセンサスによって鳥類相を明らかにするとともに、自動撮影装置によるシカの出現頻度を調査し、シカと鳥類の関係について検討した。調査の結果、鳥類はエナガやヤマガラなど25種が確認された。外来種としてはソウシチョウやハクビシン、アライグマが確認された。シカの出現頻度が最も高かったヤブツバキプロットでは、鳥類の個体数・種数ともに最も少ない傾向が得られた。

●P11 「大阪府内でのニホンカモシカの初記録～確認の経緯とその後の状況～」

○幸田良介・石塚 譲 (大阪環農水研・多様性)

国の特別天然記念物であるニホンカモシカは、近畿地方では京都府や滋賀県の北部、鈴鹿山脈、紀伊山地で分布が知られている。これまで大阪府内での確認例はなかったものの、野生動物相調査のために泉佐野市南部の犬鳴山付近に設置していた赤外線センサー付き自動撮影カメラで、2022年4月8日にその姿が撮影された。発表では、確認に至った経緯や周辺地域での生息情報、その後の確認状況等について紹介する。

●P12 「大阪府高槻市本山寺における防鹿柵設置後10年間の実生動態」

○丸山海音・松井 淳 (奈良教育大学)、幸田良介・石塚 譲 (大阪環農水研)、常俊容子 (大阪自然環境保全協会)

シカの増加に伴う森林植生への深刻な影響が全国的に問題となっている。高槻市の本山寺周辺には、大阪随一のモミ、ツガ、アカガシ等からなる天然林が分布しているが、シカの影響で下層植生が衰退し、森林更新が危惧される状態となっている。そのため「本山寺自然環境保全地域を考える協議会」により防鹿柵が設置され、植生保護の取り組みが進められてきた。発表では柵内外で10年間に渡り実施してきた実生調査の解析結果を報告する。

●P13 「聞き取りによる能勢町域の地域自然史情報把握の試み態」

丸山健一郎・道盛正樹（大阪自然史センター）、○佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

能勢町域の保全上重要種に関わる情報把握のために、能勢町で活動していた故森本弑氏、前田満氏とその活動に関わる聞き書きを生物多様性保全ネットワーク関係者を中心に行った。その結果のあらましを示す。

●P14 「私たちが取り組んできた調査活動」

米道綱夫（鉢ヶ峯の自然を守る会）

私たちは1993年に守る会設立以来数々の調査活動に取り組んできました。本年は30年目に当たり私たちの調査活動、ホテル調査、ヤマトサンショウウオ調査、ナラ枯れ調査、ツバメのねぐら調査、カワニナ調査の紹介とともに、私たちが気づかない事や調査方法に関するアドバイスなどいろいろご教示いただきたく、この場を借りて皆様にお問い合わせ申し上げます。

●P15 「「家蜘蛛」とはどんなクモか？」

関根幹夫（奈良県三郷町）

近年ネット上では、家屋内に出現するクモは「家蜘蛛」と呼ばれている。クモは益虫だから「家蜘蛛は殺すな」との成句も目にする。サーチエンジン検索数を指標とする高田（2021）の方法により検討したところ、「家蜘蛛」は一般的にはアダンソンハエトリとアシダカグモと考えられるという結果が得られた。また近年、「家蜘蛛」の検索数が増加傾向にあることから「家蜘蛛」という語は定着しつつあることが示唆された。

●P16 「大阪市天王寺区で衝突死したと考えられるトラツグミから検出されたマダニ類」

馬場 孝（大阪健康安全基盤研究所・微生物部ウイルス課）

マダニ類は吸血するだけでなく感染症を媒介するため、その分布や分散について理解することは重要である。2020年10月29日に確認された斃死トラツグミの外部寄生虫を調べたところ、キチマダニ70個体（幼虫68、若虫2）、オオトゲチマダニ2個体（幼虫1、若虫1）が検出された。トラツグミ由来のキチマダニとしては国内過去2番目に多かった。このようにマダニ類は鳥類によって市街地へも運ばれると考えられた。

●P17 「植物園において観察されたハナバチ種と訪花する園芸植物種との関係」

古川大聖（大阪府大・生命）、平井規央・○上田昇平（大阪公大・農）

大阪府内の2箇所の植物園で2022年6～11月に月1回、開花している園芸植物に訪花したハナバチ類の種組成とその頻度を調査した。ハナバチ類の観察には、20科43種の植物種を対象とし、花径長と花柱長に基づくクラスター分析により5グループに分けた。ハナバチ類については、4科30種327個体が確認され、口吻長、胸幅、胸高に基づくクラスター分析により6グループに分けた。各花グループには3～6グループのハナバチ類が訪花したことから、サイズによる対応関係はないと考えられた。

●P18 「近縁ヒゲナガハナバチ2種における、農地の集約化および周辺の都市化に対する応答の違い」

平山 楽（神戸大・人間発達）

農業生態系において、農地の集約化や周辺の都市化はハナバチ類の分布に大きな影響を及ぼしている。本研究は、同属近縁であるニッポンヒゲナガハナバチとシロスジヒゲナガハナバチの分布と花の利用パターンを調査した。結果より、ニッポンヒゲナガハナバチは集約化・都市化された草地では個体数が減少し、反対に、シロスジヒゲナガハナバチはこれらの草地で維持・増加していた。発表では、この種間差の要因について議論したい。

●P19 「大阪府能勢町の異なる環境におけるバッタ目の多様性」

中尾隆暉（大阪府大・生命）、○上田昇平・平井規央（大阪公大院・農）

大阪府豊能郡能勢町の4地点（剣尾山、倉垣のクリ園、倉垣の耕地、野間川河川敷）で2022年5～10月に月一回、スイーピングによるバッタ目の個体数調査を行った。その結果、成虫のみについて、9科33種591個体が確認された。種数については、倉垣の栗園で最も多く、剣尾山で最も少なかった。バッタ目の群集構造は地点ごとに異なっており、能勢町における里地里山の多様な環境がバッタ目昆虫の多様性に貢献していると考えられた。

●P20 「淀川城北ワンドのトンボ類群集と環境特性」

○山内悠司（大阪市在住）、鈴木真裕（大阪公立大学大学院）

城北ワンドの水域内外の生物多様性評価のために、大小4つのワンドの岸辺に設けた32地点で、2022年5～11月にトンボ類成虫のポイントセンサスを計13回行った。調査の結果、19種1293個体が確認され、優占種はコフキトンボであったが、種構成はワンドごとに異なった。上位種の環境特性を解析すると、大ワンド、小ワンド、樹林地、裸地の岸辺をそれぞれ選好する種がみられ、ワンドの規模と岸辺景観が種多様性を高めていると考えられた。

●P21 「沿岸埋め立て地堺第7-3区の淡水水域における水生動物群集とその多様性」

岩田知大（大阪府大・生命）、○上田昇平・平井規央（大阪公大院・農）

大阪府堺市の沿岸埋立地である堺第7-3区の3カ所と堺第2区の1カ所の水域で、2022年4～10月に月1回、水生動物の掬い採り調査と目視による観察を行った。調査の結果、全体で33科65種11,605個体の水生動物を採集し、10種の堺市レッドリスト掲載種を確認した。特に堺第7-3区では外来種が持ち込まれにくく、飛翔による移動が可能な昆虫種が早期に定着したことに加え、植樹等を通して形成された植生環境と海に面した立地が多様性を高めていると考えられた。

●P22 「泉佐野市大木周辺のため池における水生動物群集とその多様性」

楠田敬太（大阪府大・生命）、○上田昇平・平井規央（大阪公大院・農）

大阪府泉佐野市大木の農村景観は中世の日根荘に由来し、重要文化的景観に選定されている。本研究では、この地区で古くから管理が行われている5地点の農業用ため池で2022年5～11月に月1回、水生動物のすくい採り調査を行った。その結果、10綱17目57種2,507個体の水生動物を確認した。オグマサナエ、アカハライモリなど5種の環境省レッドリスト掲載種が確認された一方で、ウシガエルやアメリカザリガニなどの侵略的外来種も見られ、特にこれらが侵入した池では多様性の低下が認められた。

●P23 「滋賀県におけるモリアオガエルの生息状況把握の試み」

○小林凌介・水戸 直・齊藤 修（長浜バイオ大学バイオサイエンス研究科）

モリアオガエルは、樹上に泡巣を作って産卵する特徴で良く知られているが、多くの県で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。滋賀県ではまだレッドリスト記載種ではないが、現状把握の為、全県調査を行った。過去の発見情報を参考に、木々が多い湿地や池、イモリの生息などの条件を頼りに探索した結果、29か所の繁殖地を見つけた。各繁殖地で、卵塊数及び産卵利用樹木の調査、更に採取サンプルの遺伝系統解析を行ったので報告する。

●P24 「堺市のヤマトサンショウウオ生息地における水生動物群集」

和田直樹（大阪府大・生命）、○上田昇平・平井規央（大阪公大院・農）

大阪府堺市の3地点（A、B、C）の水域で、2022年2～10月にヤマトサンショウウオ（以下、本種）の生息調査、水生動物の掬い採り調査をおこない、Aでは自動撮影カメラによる動物の観察も行なった。調査の結果、A、Bでのみ本種幼生が確認され、Aでは成体と卵嚢も確認された。本種の外来種の天敵として、Aではアライグマ、Cではアメリカザリガニなどが確認された。また、本種の餌候補として、A、Bではミズムシが多く確認された。

●P25 「滋賀県で唯一オオサンショウウオの繁殖が確認されている小渓流での幼生調査」

○湯川颯太・水戸 直（長浜バイオ大学バイオサイエンス研究科）、大山考一（古橋のオオサンショウウオを守る会）、齊藤 修（長浜バイオ大学バイオサイエンス研究科）

日本のオオサンショウウオは、近年中国種との種間雑種が生まれる遺伝子汚染が深刻化し、絶滅が懸念されている。滋賀県内でのオオサンショウウオの生息状況は、以前は殆ど調べられていなかったが、最近、県の北東部の小渓流・大谷川で100匹を超える日本固有種の集団が見つかり、繁殖も確認された。この貴重な集団の健全性を知る為、1年間の継続的な幼生調査（出現時期、場所、成長、交雑判定）を行ったので報告する。

●P26 「タンゴスジシマドジョウとオオシマドジョウの分布重複域で確認された種間交雑」

○上地健琉・八嶋勇氣（近畿大学大学院農学研究科環境管理学）、  
平尾 舞（近畿大学農学部環境管理学科）、北川忠生（近畿大学大学院農学研究科環境管理学）

同一河川に生息する異質4倍体性種のタンゴスジシマドジョウと同質4倍体種のオオシマドジョウとの分布重複域から2種の間中間的な形態を持つ交雑個体が採取された。核DNAとmtDNAの分析の結果、この個体がタンゴスジシマドジョウを母系親種とする交雑個体であることが確認された。このことから想定される種間交雑が生じた要因と、国内希少野生動植物種であるタンゴスジシマドジョウへの影響について考察する。

●P27 「2022年度の淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワークの活動報告」

○西村 碧・林 歩実・古野太稀・鶴田哲也（大阪産業大学）、  
田中耕司（大阪工業大学）、山本義彦・丸山勇氣（大阪環農水研）、  
綾 史郎（淀川水系イタセンパラ研究会）

淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク（以下、イタセンネット）では、淀川の城北ワンド群と庭窪ワンド群で外来魚駆除等の保全活動を実施してきた。しかしながら新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、2020～2021年にかけては保全活動の休止、縮小を余儀なくされた。本発表では、コロナ禍以前とほぼ同様の活動が可能となった2022年度のイタセンネットの活動状況や外来魚の動向を紹介する。

●P28 「榎井川水系における採捕調査と環境DNA解析による淡水魚類相の把握」

芝野喜美子（大阪府大・生命）、上田昇平・平井規央（大阪公大院・農）

榎井川水系の6地点で2022年6～11月に計6回、採捕調査と環境DNA解析を用いて淡水魚類相の調査を行った。その結果、採捕調査では5目9科21種、環境DNA解析では4目7科17種が確認された。両手法に共通して13種が、採捕調査のみで8種が、環境DNA解析のみで4種が確認された。採捕調査と環境DNA解析では確認しやすい魚種が異なるため、両手法を組み合わせることで補完的に淡水魚類相を把握することができると考えられた。

●P29 「MBS関西ジャ二博 道頓堀川で絶滅危惧種ニホンウナギの生息を確認！」

尾寄 豪・京原雄介・松本みゆき（MBS）、谷口美希子・團 航・○岡山 源・奥本彩葉（MBS企画）、山本義彦（大阪環農水研・多様性）、亀井哲夫（大阪動植物海洋専門学校）

“テレビのバラエティ番組でscienceをどこまで実践できるか“。「関西ジャ二博」ではその命題に取り組み、2022年3月から道頓堀川の生物調査を開始した。潜水調査や水中ドローン、環境DNA調査を経て、2022年11月に公式調査としてニホンウナギを初めて捕獲した。耳石分析や博物館への標本登録を行い、2023年1月にその経緯を放送した。今後は「都会の生物多様性の保全」を含めて問題提起していきたい。

---

地域自然史と保全研究大会  
関西自然保護機構（KONC）2023年大会  
プログラム・講演要旨集

発行 2023年2月26日

発行者 関西自然保護機構

事務局 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23  
大阪自然史センター気付

郵便振替口座 00990-2-16679

TEL 06-6697-6262 FAX 06-6697-6306

E-mail [konc@mus-nh.city.osaka.jp](mailto:konc@mus-nh.city.osaka.jp)

URL: <http://www.omnh.net/konc>

---

関西自然保護機構 入会のご案内

関西自然保護機構のおもな活動内容は次の通りです。（1）自然保護・自然環境保全に関する調査・研究の実施、（2）シンポジウム・セミナー・講演会などの開催、（3）現地見学会の開催、（4）調査・研究に対する助成事業の実施、（5）会誌・ニュースの発行、（6）自然保護および自然環境保全に関する提言と助言

<会費>

●正会員

○紙媒体及び電子媒体の会誌の配布 5,000円/年

○電子媒体の会誌の配布のみ 2,500円/年

●維持会員

団体：一口10万円/年、 個人：一口 1万円/年

\*正会員会費に寄付金を付加したのものとして扱わせて頂きます。

<寄付>

少額寄付から随時歓迎します。

---